

国語学国文学

教授	大槻 信	国語学, 特に古代・中古
教授	金光 桂子	国文学, 特に中古・中世
准教授	河村 瑛子	国文学, 特に近世文学
准教授	田中 草大	国語学, 特に文語の歴史

〔主要著書・論文等〕

- 大槻 『平安時代辞書論考 一辞書と材料一』吉川弘文館, 「古代日本語のうつりかわり 一読むことと書くこと一」(『日本語の起源と古代日本語』臨川書店)。
- 金光 『中世の王朝物語 享受と創造』臨川書店, 『時雨物語絵巻の研究』臨川書店 (共著)。
- 河村 『古俳諧研究』和泉書院, 「『笈の小文』旅中書簡小考」(『雅俗』18)。
- 田中 『平安時代における変体漢文の研究』勉誠出版, 「『尾張国解文』現存テキストの成立についての試論」(『国語国文』87-12)。

授業は, 上記の専任教員のほかに, 人間・環境学研究科の国語学国文学の教員と, 数名の非常勤講師によって行われる。他に, 学部生対象の授業が開講されているが, 自分の研究にとって有益であると思われるものは, 単位とは無関係に履修することを勧める。

本専修では, 大学院生の自主性を重んじて, 教員からの助言は必要最少限にとどめるよう努めている。文献を読むときには注釈的に読むこと, できる限り文献が書かれた当時の理解に近づくこと, 文献の背景の文化史, 文学史, 国語史の流れを押さえておくこと, こうした基本的な態度を身につけた上で, 各自の問題意識に従って自由に研究を展開することを望んでいる。

大学院生は, 卒業論文を書いたことを契機にして, 各自が一応専攻分野を持っているが, あまり早くから自分の関心の対象を限定せず, 国語学国文学の様々な問題に幅広く関心を持つことが望ましい。それが引いては専攻分野での問題意識を鋭く, 豊かにもするであろう。

国語学国文学研究室では, 研究活動の一環として, 月刊誌『国語国文』を刊行している。国語学国文学関係の専門誌として, 東京大学の『国語と国文学』と並んで歴史が古く, 権威ある雑誌として学界から認められている。また, 近年『京都大学 国文学論叢』という春秋二期の専門誌も大学院生の編集の下に刊行している。学部の卒業論文のすぐれたものがこれらに掲載されることもある。当然, 修士論文はこれらに掲載されるレベル以上のものでなければならない。そして博士後期課程では, 毎年一, 二編の論文を『国語国文』や『京都大学 国文学論叢』に発表し, それらを中心に課程博士の学位論文をまとめてゆくことが期待される。

中国語学中国文学専修

教授 木津 祐子 中国語学史

著書 『京都大学文学研究科蔵琉球写本『人中画』付『百姓』』（臨川書店、2013）

論文 「「箇」の個別化機能と定指“量名”構造」（2019）、「京都大学蔵王筠校祁寯藻刻『説文解字繫伝』四十巻について」（2020）、「「官話」再読」（2022）

教授 緑川 英樹 中国古典文学

著書 『韓愈詩訳注』（共著、研文出版、2015～）、『文選 詩篇』（共著、岩波文庫、2018～19）

論文 「欧陽修的美醜意識及其表現—圍繞対韓愈詩“醜惡之美”の接受」（2018）、「万里集九《帳中香》的詩学文献価値」（2021）

准教授 成田 健太郎 中国古典学、中国書論史

著書 『中国中古の書学理論』（京都大学学術出版会、2016）

論文 「王羲之と衛夫人の師承関係について」（2020）、「唐宋の蘭亭伝説について」（2021）

上記に加えて、人文科学研究所所属の下記の教員が教育と研究指導に参加している。

教授 池田 巧 漢藏語方言学

著書 『清華の三巨頭』（共著、研文出版、2014）

論文 「木雅語作格特徴」（2015）、「俯觀藏羌彝走廊的語言分布及其相關的研究課題」（2017）、「大谷大學所藏本《呂蘇譯語》について」（2019）

准教授 永田 知之 中国古典文学

著書 『唐代の文学理論—「復古」と「創新」』（京都大学学術出版会、2015）、『理論と批評 古典中国の文学思潮』（臨川書店、2019）

論文 「中国文学批評史と近代の文学論—20世紀前半の通史を材料に—」（2019）、「詩歌に伴う書簡—『万葉集』と唐代前期までの詩の贈答を通して—」（2022）

准教授 野原 将揮 中国語音韻学

論文 「構擬上古音***Kr** : 以《安大簡》「織」為例」（2022）、「Old Chinese “egg”: More evidence for consonant clusters」（2022）、「闽语中来自***m.r**和***ŋ.r**的来母字」（2022）

漢民族によって築かれてきた中国の言語と文学は、時間的にも空間的にも他に比類がないほど広大な範囲に及んでいる。三千年を越える長い時期に及び、ヨーロッパに重なるほどの広い地域にわたって、一つの文化がとぎれることのない伝統を維持してきた。かつてはその中心に詩文などの正統的文学が位置し、時代の流れの中で戯曲、小説など多彩なジャンルを生み出しながら、二十世紀以降には文語に代わって口語が文学の言語としてふつうのものになるに至る。そこには多様性と統一性の共存がある。

本専修では、近代以前と近現代を異種の存在とする態度をとらない。また言語と文学とはそもそも切り離せないものである以上、中国語学と中国文学とを分離せずに、相補うかたちで学ぶ必要がある。したがって、いかなる分野の研究をめざすにせよ、古典文・古典詩・白話文の全般にわたる原典の十分な読解力、通時的研究・共時的研究のふたつの態度を両立させる視野、語学・文学にまたがる基礎

知識を要求する。その上にたって「なにが書いてあるか」はもとより「いかに表現しているか」を検討することこそが言語・文学の研究にほかならない。

日本の文化がその当初から中国の言語・文化と深く関わりを持ちつつ形成されてきたことはいうまでもない。研究の蓄積の最も豊かな国の一つに数えられよう。そうした伝統を生かしつつ、今日の要請に答えられる新たな研究を切り開くには、広い視野の中で中国の言語・文学を捉える態度が必要であろう。中国学の歴史は長いが、今日のこされている問題は限りなく多い。中国の文学が過去の伝統を帯びながら時代に応じて変化してきたように、その研究も伝統と現代とをいかに調和させるか、大きな課題を与えられている。問題点を自力で見いだし、考える意欲をもちつづけることを期待する。

研究を発展させていくにあたっては、海外の研究者と直接に意見交換できるだけの現代中国語・欧米諸語の運用能力が不可欠となるであろうこともとくに強調しておかねばならない。自国の文化に対する深い理解と愛着をもつ中国、古典古代以来の人文学の厚みを背景とする欧米、いずれも学ぶべき長所をあまた有するからである。



京大中文初代教授狩野君山像を囲んで（於人文科学研究所中庭）

中国哲学史専修

教授 宇佐美 文理 中国近世思想史
准教授 池田 恭哉 中国中世思想史

〔主要著書・論文等〕

宇佐美 『『歴代名画記』〈気〉の芸術論』岩波書店 2010, 『中国絵画入門』(岩波新書) 岩波書店 2014, 『中国藝術理論史研究』創文社 2015, 「杜甫詩における視覚の問題」(『日本中國學會報』第六十九集) 2017。

池田 『南北朝時代の士大夫と社会』研文出版 2018, 『中国史書入門 現代語訳 北齊書』(共著) 勉誠出版 2021, 「熊安生伝」(『京都大学文学部研究紀要』62号) 2023。

上記に加えて、人文科学研究所所属の下記の教員が教育と研究指導に参加している。

教授 古勝 隆一 中国古典学

〔主要著書・論文等〕

古勝 『中国中古の学術』研文出版 2006, 『目録学の誕生』臨川書店 2019, 『漢唐注疏写本研究』社会科学文献出版社 2021。

文学部の専修案内に、私どもは「中国哲学史は、中国人の思索の歩みを研究する学問である」、
「中国人が何をどのように考えたかを知ること、中国哲学史研究はこの一事につきる」と記した。
中国人の思想的営みを歴史文化の一環として把握すること、これが中国哲学史に対する私どもの一貫した基本的姿勢である。従って、学部と大学院において研究教育内容が根本的に異なることはあり得ない。大学院の研究教育においても、学部におけると同様、「一切の先入観を捨て、中国人の立場に立ってその思考を跡づけることがまず必要であり」、そのために「何よりもまず中国古典、いわゆる漢文が正確に読めることが必要である」ことに何の変わりもない。大学院生にとっても、やはり「漢文読解力修得が第一の肝要事である」。ただし、研究者養成を主要目的とする大学院においては、当然のことながら、学部よりはるかに高度な学力が要求される。文意の正確な理解はもとよりのこと、その文献の文献学的考証、書かれた時代の状況、著者の生い立ちなどを正しくふまえた上で、内容のみならず用語や表現にまで鋭敏に反応する能力を修得しなければならない。読むことに関しては、修士課程修了の段階で、少なくとも自らの専門分野については独立した研究者としての能力を身につけてもらわなければならない。

しかし、学力養成のみが大学院教育の目的でないことは言うまでもない。その最終目的は独創的研究者としての基盤を確立すること、具体的にいえば学位(修士・博士)論文を完成することであって、文献処理の精確さはその不可欠の前提にすぎない。ただ、この目的は全て院生諸君自身の力によって達成されなければならない。何を研究題目に選ぶかと、いかなる研究方法をとろうと、それが学術的水準を満たしている限り、まったく諸君の自由であり、私どもは原則として口出しはしな

い。というよりむしろ、誰の模倣でもない君独自の問題意識と方法でなければ困るのである(念のために注意しておくが、このことは先人の研究成果への敬意と学習が不要であることを意味するものでは決してない)。むろん私どもは、スーパーヴァイザーとして研究計画の策定、執筆項目の設定、参考文献の指示などできる限りの“指導”は惜しまない。が、それはあくまで技術向上のためのコーチングにすぎないのであり、研究の遂行は全て君自身の主体的責任と意欲によって果たされるべきものであることを銘記しておいてもらいたい。

インド古典学専修

教授 横地 優子 古典サンスクリット文学, ヒンドゥー教史

教授 ソームデーヴ・ヴァースデーヴァ インド思想, シヴァ教, サンスクリット文学・文学理論
特定外国語担当講師 潘 涛 (パン タオ) インド・イラン文献学、印欧言語学、トカラ仏教

〔主要著書・論文等〕

横地『ヒンドゥー教の聖典二篇：ギータ・ゴヴィンダ, デーヴィー・マーハートミヤ』(小倉泰と共著), 平凡社(東洋文庫), 2000年。同 *The Skandapurāṇa Volume III, Adhyāyas 34.1-61, 53-69. The Vindhyaśinī Cycle*. Leiden & Groningen, 2013.

ヴァースデーヴァ *The Recognition of Śakuntalā by Kālidāsa*. Clay Sanskrit Library. New York 2006. 同 *The Yoga of the Mālinīvijayottara*. Collection Indologie 97. Pondichéry 2004.

潘 *Untersuchungen zu Lexicon and Metrik des Tocharischen*. PhD dissertation, Ludwig-Maximilians-Universität, München, 2019.

本専修は、従来あった「インド哲学史」専修と「サンスクリット語学サンスクリット文学」専修を統合して、2004年度より開設されたものである。サンスクリットは、厳密には規範化された古代インド・アリア語を意味するが、本専修では、この言語で残された文献と並んで、時代的にサンスクリットに先行するヴェーダ語、サンスクリットの俗語形である「中期インド」諸語、一部の仏教文献に見られる仏教梵語、叙事詩に特有の叙事詩サンスクリットなど、古代のインド・アリア系諸言語で編纂された膨大な量の文献も研究の対象としている。また、サンスクリット文献と密接な関係を持つ、古代イラン語文献やタミル語の古典文献も扱われることがある。本専修の役割は、過去のサンスクリット学の研究成果を継承しつつ、古代インドの言語、文学、哲学、宗教、文化史等の研究を進展させ、それを次世代に引き継ぐことにある。

専修主任の横地は、古典サンスクリット文学と、ヒンドゥー教の神話・伝説を多く含むプラーナ文献等の研究を専門としており、とりわけヒンドゥー教女神神話の形成・発展について詳しい。教授のヴァースデーヴァはインド哲学全般を扱うが、特にシヴァ教文献及び古典文学とその理論(詩論・修辞学等)を専門とし、近年は新論理学の研究に力をいれている。潘はトカラ語文献を専門とするが、南アジアから中央アジアにおいて使われたインド・イラン語文献、中央アジア出土の写本全般にくわしい。

また、毎年学内外から数名の講師を招き、ヴェーダ文献、中期インド語、近現代インド諸語、土着文法学、科学史等の授業を開講している。

本専修は国際的にインド古典学の主要な教育・研究拠点の一つとして認められており、海外の研究者との研究交流、共同研究もさかんに行われている。そのような現状をふまえて、本専修の授業のほぼ半分は英語で行われている。学生は日常的に英語での議論や質疑に参加することで、英語のコミュニケーション能力を高めることができる。

「文献学」で掘り起こせ!

～古代インドの思想大発掘!!～



魅力いっぱい! 古代インドの思想

私たちの知的好奇心を刺激する古代インドの多彩な思想。その根本をたどって探せば、そこには人類の「生」に対する古代インド人の独特な洞察があります。数千年を経ても色あせない古代インドの思想は、いまなお私たちの魂を打動します。

西洋人もビックリ!

16世紀以降、古代インドの思想に出会った西洋の知識人たちは、彼らは、その思想の奥深さに驚き、大きな影響を受けました。インドに影響を与えたドイツの作家、ヘルマン・ヘッセ。



インドに影響を与えたドイツの作家、ヘルマン・ヘッセ。

古いインドの思想を知るにはど～すればいいの?

もちろん、自分で直接読破できくわけにはいかないから



遺跡を調査

古代の暮らしぶりや芸術を今に伝えてくれる遺跡や遺物。ただ、想像が形として残りにくい。



現在の宗教を調査

いまある神教も調査して思想を分析すれば、かつての思想を窺い取ることも可能だ。しかし、伝承の途中にはさまざまな変容もあったはず。



写本研究を基盤とする「文献学」

文献学とは?

- ◆ 古代人の書き残したものを、徹底的に解読し、
- ◆ 現代のコトバに翻訳し、
- ◆ その思想を再構築する。

文献学は、16世紀以降の発掘作業。はるかなる昔の思想を掘り起こすのだから簡単ではありません。そこには何段階にもわたる地道なプロセスがあるのです。



そして、古代人の思想を体系的に解読するまで理解するには...

これが文献学のプロセスだ!!

カーリダーサ作「クマラーの誕生」2章10節を参考にしてみよう!



ジュニア・オープンキャンパスのポスターセッション用ポスター（学生製作）

仏教学専修

教授 宮崎 泉

〔主要著書・論文等〕 『中観優波提舍開宝篋』テキスト・訳注『京都大学文学部研究紀要』46, 2007. Atiśa (Dīpamkaraśrījñāna)—His Philosophy, Practice and its Sources, The Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, 65, 2007. 『禅定灯明論』に説かれる漸門派説について、『仏教史学研究』51-1, 2008. インド大乘仏教における解脱の思想と慈悲、『日本の哲学』12, 2011. Atiśa の如来蔵思想—その典拠と大中—、『印度学佛教学研究』65-2, 2017 他

本専修は、インド及びチベットの仏教思想史の研究と教育を中心としているが、中国仏教については人文科学研究所のスタッフその他学内及び学外の研究者の出講によってこれを補っている。日本仏教は扱わない。

本専修を志望するものは、サンスクリット語（パーリ語）及びチベット語の修得を既に終わり、かなりの程度にオリジナルの文献を読んだ経験のある者が望ましい。漢文仏教文献を扱い得る漢文の素養も必要であることはいうまでもない。仏教学は国際性の高い学問であり、諸外国の研究者や留学生との交流や留学の機会も多いため、本格的に研究を進めようと思う学生は英・独・仏のうち少なくとも一つについては作文・会話を含めて十分に習得することが望まれる。

宮崎教授は後期インド仏教を専門とし、そのチベットへの伝播についても関心を持っている。特に、インド禅定思想のチベットへの受用の問題、並びに大乘仏教の展開について研究中である。

本専修のスタッフによる特殊講義、演習、講読のほかに、サンスクリット語、パーリ語、チベット語の初級、中級の授業も用意され、またインド古典学専修の授業のうちいくつかは本専修と共通となっている。

令和5年度には学外から来講している室寺義仁講師(滋賀医科大学非常勤講師)が瑜伽行派を、佐藤直実講師(宗教情報センター研究員)が大乘経典を、志賀浄邦講師(京都産業大学教授)がインド仏教論理学を、加納和雄講師(駒澤大学准教授)がサンスクリット写本読解を、高橋慶治講師(愛知県立大学教授)がチベット語中級を担当し、船山徹講師(人文科学研究所教授)が中国仏教を、熊谷誠慈講師(人と社会の未来研究院准教授)がアビダルマを、デロシュ マルク ヘンリ講師(総合生存学館准教授)がチベット仏教瞑想論を、倉本尚徳講師(人文科学研究所准教授)が中国仏教を講じている。

西洋古典学専修

准教授 河島 思朗 西洋古典語学西洋古典文学
助 教 竹下 哲文 西洋古典語学西洋古典文学

〔主要著書・論文等〕

河島『古代ローマ ごくふつうの50人の歴史 一無名の人々の暮らしの物語』（さくら舎, 2023）, 『基本から学ぶラテン語』（ナツメ社, 2016）, 『西洋古典学のアプローチ』（共編著, 晃洋書房, 2021）, 『ホメロス『イリアス』への招待』（共著, ピナケス出版, 2019）
竹下『詩の中の宇宙 マーニールウス『アストロノミカ』の世界』（京都大学学術出版会, 2021）, G. ヴァルトヘル『西洋古代の地震』（共訳, 京都大学学術出版会, 2021）

紀元前8世紀のホメロスから後2世紀のローマの著述家まで、ギリシア語・ラテン語を用い同一の文化的精神的伝統を共有する世界を古典古代という。そこにおいてギリシア文学は叙事詩・抒情詩・悲劇・喜劇・歴史・牧歌・小説など、さまざまな文学ジャンルを生み出し、ラテン文学はギリシア文学を継承しつつ、恋愛詩・風刺詩・弁論など独自の発展を織り込んでルネッサンス以後の再生に連なる古典の伝統を築き上げた。

本専修は、一方で、これらの文学作品を主要な研究対象とする。さらに、古典古代にギリシア語とラテン語で書かれたすべての文献をも研究領域に含めつつ、原典批判を基本に、テキストを精細に読み、背景にある伝統を踏まえ、文脈に即した解釈を提起すべく研究を進める。

その一方、西洋古典学という学問の特質、および、古典古代以前と以後にも注意と目配りを忘れない。すなわち、西洋古典学は古代にあっても近代の新たな出発点にあっても、文学、哲学、歴史学など人文科学分野にとどまらず、数学、物理学、天文学、医学、生物学などの自然科学分野をも含んで、人間にかかわるすべての学問分野にまたがる形で成立し、その根幹には人間を分割しえない完結した個体として総体的に捉えようとする視点があった。また、ギリシア文化の形成にあたっては、エジプトやメソポタミアの先進国から多大な影響が及び、他方、古典文化の伝統はビザンチン文化やカロリング朝文化、さらにはイスラム文化によって継承されたという、文化史の大きな流れを視野からはずすことはできない。

本専修における大学院進学者は、京都大学文学部出身者よりも他大学出身者の方が多い。古典の語学・文学を研究する学生はもちろん、文化を研究する学生にとっても、もっとも重要なのは第一次資料となるギリシア語・ラテン語の原典を読みこなす能力である。また、辞書・研究書は外国語のものがほとんどであるから、英・独・仏等の近代語にも堪能であることが要求される。古典古代を広い視野から研究するために、古代哲学史・西洋古代史の授業をも積極的に受講することが望まれる。

スラブ語学スラブ文学専修

教授 中村 唯史 近現代ロシア文学・思想, ソ連文化論

[主要著書・論文等] 『ロシア文学からの旅：交錯する人と言葉』(共編著, ミネルヴァ書房, 2022), バーベリ著『騎兵隊』(翻訳・解説, 松籟社, 2022), 『二十六人の男と一人の女：ゴリキー傑作選』(翻訳・解説, 光文社古典新訳文庫, 2019), 『自叙の迷宮：近代ロシア文化における自伝的言説』(共編著, 水声社, 2018), トルストイ著「ハジ・ムラート」『ポケットマスターピース4・トルストイ』(翻訳, 集英社文庫, 2016 所収), 『再考ロシア・フォルマリズム：言語・メディア・知覚』(共編著, せりか書房, 2012)

また、上記に加えて、下記の先生が、協力教員として、教育および研究指導に当たっている。

准教授 堀口 大樹 (人間・環境学研究科) スラブ語学, バルト語学

[主要著書・論文] Имперфективация заимствованных глаголов в русском языке. *Russian Linguistics*. 42, 345-356, 2018, 『ニューエクスプレスプラス・ラトヴィア語』(白水社, 2018), Восприятие обозначения "русскоязычных" в балтийских странах: социолингвистический опрос. *W poszukiwaniu tożsamości językowej*. 6. 39-48, 2021.

本専修は、それぞれに固有の特徴を示す一方で、多くの共通点を持つスラブ諸民族の言語と文学、そして文化を総体的に踏まえつつ、日露比較文学を含む個別的な対象の教育・研究を進めることを趣旨としている。ロシア政府・軍によるウクライナ侵攻という事態は、日本ではなお多分に未知の領域であるこの地域の文学・文化・思想を研究することの重要性を示している。

専任教員の中村は、20世紀のロシア語文学と多民族・多文化性を標榜したソ連文化の研究から出発して、現在は19世紀から20世紀初頭のロシア文学・思想へと関心を広げている。協力教員の堀口は、ロシア語とラトヴィア語を主な対象としたスラブ語学とバルト語学を専門とし、テキストの特徴やコミュニケーションの場面、さらには社会や文化、歴史などの多角的な視点から言語事象を研究している。

本専修では、文献を緻密に読み解き、解釈する作業と、週2回のゼミでの報告とディスカッションを軸とし、ロシアの文学・文化・言語・思想、ポーランドの言語・文化、および考察の枠組や方法等に関する授業を開講している。院生諸君の関心は多様であり、それぞれの興味に応じて自由にテーマを選び、研究を進めている。授業も、本学の文学研究科、他の研究科の教員、ならびに非常勤の先生方の応援を得て、できる限り幅広く、かつバランスよく開講できるように努めている。ロシア、ポーランド関係の授業の他にもチェコ語の勉強会が実施され、学外・国内外の研究者を招いての公開講演会や上映会も行っている。

当専修を志望する諸君は、まず自分の専門分野を確立したうえで、将来的には、幅広い研究を目指してほしい。学部でロシア語・ロシア文学を専攻した人は大学院入学後に他のスラブ語や文学について学ぶ必要が出てくるかもしれない。他方、ロシア語がスラブ研究のための国際的共通語として重要な地位にあった経緯に鑑み、また19世紀ロシア文学が近代日本文学に深甚な影響を及ぼしてきた事実もあるので、ロシア以外の言語・文学を専攻した人も、入学までにできる限りロシア語の力をつけ

てきてほしい。とはいえ、修士課程入学時にまず第一に要求されるのは、それぞれが学部で専攻した言語、分野についての十分な学力と、自主的に勉学と研究を進めるための意欲である。

広範な文化現象を対象としうる本専修においては、担当教員が十全な知識をもって院生諸君の要望に応えられない場合も想定されるが、そのようなときでも諸君と意見や見解を交わすことはできる。人文学の基本が「対話」であると喝破した文芸学者ミハイル・バフチンを生んだロシアを初めとするスラブ文化の研究を志す諸君に期待したいのは、言語に対する感性を磨き、文化や歴史に関する知識を拓けようとする意欲とともに、それらの感性や知識に基づいて生じた自分の見解を教員や先輩と交差させ、たえず検証する開かれた姿勢である。

(詳しい情報については、下記のアドレスから、当専修ホームページをご覧ください)

https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/slavic_lang_lit/sll-top_page-3/



写真：専修主催公開講演会 チンチ・クラブリ氏(ヘルシンキ大学)

「ソ連とロシアにおけるサーミ文学」(2022年11月)

ドイツ語学ドイツ文学専修

教授 松村 朋彦 近代ドイツ文学・文化史（令和6年3月退職予定）

准教授 川島 隆 近現代ドイツ文学・メディア論

〔主要著書・論文等〕 松村『越境と内省 近代ドイツ文学の異文化像』（鳥影社，2009），『五感で読むドイツ文学』（鳥影社，2017），『文学と政治 近現代ドイツの想像力』（共著，松籟社，2017）。川島『カフカの〈中国〉と同時代言説』（彩流社，2010），『ハイジ神話 世界を征服した「アルプスの少女」』（訳書，晃洋書房，2015），カフカ『変身』（訳書，角川文庫，2022）。

本専修の研究教育の対象領域は、中世から現代へといたるドイツ語圏（オーストリア，スイスを含む）の言語文化全般にわたっている。松村教授は，18世紀後半から19世紀前半にかけてのドイツ文学を文化史的な観点から考察しようと試みている。川島准教授は，19世紀から現代に至るまでのドイツ文学をジェンダー論的に読むかたわら，メディア論にも関心を寄せている。専任教員の専門分野からもわかるように，研究教育の中心をなしているのは18世紀以降のドイツ文学であるが，それ以外の研究領域についても，人間・環境学研究科や人文科学研究所の教員ならびに他大学からの非常勤講師，さらには外国人教師の協力を得て，多種多様な授業が開講されている。ドイツ語学に関する授業も毎年おこなわれている。授業の他に，学生による読書会も盛んである。

本分野の研究教育の特色は，講座開設当初から一貫して，原典の綿密な読解を重視する点にあり，この伝統は今日もなお生きつづけている。だが他方では，新しい方法論の出現と対象領域の拡大によってますます多様化しつつある現在の研究状況をふまえて，せまい意味での語学・文学研究の枠組にとらわれることなく，広くドイツ語圏の諸芸術や文化と社会のさまざまな問題に目を向けることもまた必要であろう。

さらに，ドイツ語圏の言語文化が他の欧米諸国との密接な影響関係のもとに成立，発展してきたことを考えるなら，ドイツ語学ドイツ文学を西洋文化全体とのかかわりのなかでとらえようとする視点もまた，今後ますます重要になってくるだろう。

このような意味で，ドイツ語学ドイツ文学を研究しようとする学生諸君には，ドイツ語のテキストを正確に読みこなすだけの語学力と西洋文化全般に対する広範な関心を期待したい。

英語学英米文学専修

教授	家入 葉子	英語学
教授	廣田 篤彦	イギリス演劇
教授	森 慎一郎	アメリカ小説
准教授	小林 久美子	アメリカ小説
准教授	南谷 奉良	イギリス・アイルランド小説

〔主要著書・論文等〕 家入 *Negative Constructions in Middle English* (Kyushu University Press, 2001). *Verbs of Implicit Negation and their Complements in the History of English* (John Benjamins, 2010).

廣田 “The Tardy-Apish Nation in a Homespun Kingdom: Sartorial Representations of Unstable English Identity”, *Cahiers Élisabéthains* 78 (Université Paul-Valéry Montpellier III 2010). “Circes in Ephesus: Civic Affiliations in *The Comedy of Errors* and Early Modern English Identity”, *The Shakespearean International Yearbook* 10 (Ashgate 2010).

森 「ギャツビー・ゴネグション —— フィッツジェラルド『偉大なギャツビー』をめぐって」『みすず』第46巻第3号。同アラスター・グレイ『ラナーク——四巻からなる伝記』訳書，国書刊行会。

小林 「『人間の根源的な状況』について」（『フォークナー』18号、2016年）。“‘Only the Flat Irons’: Counter-monuments in *The Sound and the Fury*” (*The Journal of the American Literature Society of Japan* Vol. 12, 2014年)。

南谷 “The Metamorphosis of Stephen Da(e)dalus: The Plesiosaurus and the Slimy Sea,” *James Joyce Quarterly*, vol. 58 (Fall 2020-Winter 2021). 「『ユリシーズ』と動物の痛み—レオポルド・ブルームの優しさについて」『ジョイスの挑戦—『ユリシーズ』に嵌る方法 (JJJS(Japanese James Joyce Studies)) 金井嘉彦, 吉川信, 横内一雄編著, 言叢社, 2022年

本専修の特殊講義および演習は専任教員のほか，人間・環境学研究科および学外の教員によって行われ，英語学英文学およびアメリカ文学のほぼすべての分野を網羅するようになっている。英米人教員によるものを除いて，講義および演習は日本語で行われるが，その場合にも教材は英語の原典を用い，作品の正確で厳密な読解を特に重視する。

研究テーマおよび方法論はすべて学生の独自性にまかされており，自由なテーマについて研究を進めるのが本専修の基本方針である。ただし，とくに前期課程においては特定の狭い分野にのみ目を向けることなく，隣接する分野についても広い関心を養ってほしい。

最近では外国での学会で院生が研究発表を行う機会も珍しくない。研究室で行われる外国からの研究者による特別講演，セミナー等にも積極的に参加・貢献することが望まれる。

フランス語学フランス文学専修

教授	永盛 克也	17世紀フランス文学、ラシーヌ
教授	村上 祐二	フランス近現代文学、プルースト
准教授	鳥山 定嗣	フランス近代詩、ヴァレリー
特定准教授	ジュスティーン・ル・フロック	17世紀フランスの思想と文学

上記に加えて、人文科学研究所所属の下記の教員が教育と研究指導に参加している。

教授	森本 淳生	19-20世紀フランスの文学と思想 マラルメ、ヴァレリー
----	-------	------------------------------

[主要著書・論文等]

永盛『文学作品が生まれるとき—生成のフランス文学』（京都大学学術出版会、2010）（共著）；
Comment la fiction fait histoire, Champion, 2015（共著）；*Scandales de théâtre en Orient et en Occident*, Sophia UP, 2021（共著）

村上 *La Grande Guerre des écrivains, d'Apollinaire à Zweig*, Gallimard, 2014（共編著）；Marcel Proust, *Cahier 44*, Brepols Publishers/BnF, 2015, 2 vol.（批評校訂版）

鳥山『ヴァレリーの『旧詩帖』—初期詩篇の改変から詩的自伝へ』（水声社、2018）；*Paul Valéry et les écrivains*, Fata Morgana, 2018（共著）

ル・フロック *Ardeur et vengeance : anthropologie de la colère au XVIIe siècle*, Champion, 2023（à paraître）

森本『〈生表象〉の近代—自伝、フィクション、学知』（編著）、水声社、2015；*Paul Valéry. L'Imaginaire et la genèse du sujet. De la psychologie à la poétique*, Minard Lettres Modernes, 2009

さらに、学外の教員が講師として教育と研究指導に随時参加しており、2023年度は伊藤玄吾同志社大学准教授が16世紀の文学を講じている。

本専修の学生はフランスの文学・芸術・歴史・言語について広く学び、とくに関心のある主題について深い知識を身につけることが求められる。研究対象は狭義の「文学」に限ることなく自由に選ぶことができる。それだけに学生自身が自覚的に問題意識をもつことが重要になる。

本専修ではフランス語で修士論文を執筆することが義務づけられているため、高度の語学力が要求されるが、論文の準備と執筆を通して実践的に研究方法を習得してもらうことがその主眼である。専任のフランス人教員はフランスの伝統的なテキスト解釈法や小論文執筆の方法を実践的に教授し、さらにはフランス政府給費留学生試験の準備や修士論文の指導・添削にも関わっている。

本専修は学生・大学院生に対して留学を推奨しており、留学に関する相談には教員がきめ細かく応じている。実際、大学間協定や奨学金制度を利用してフランスやスイスの大学に留学する学生、フランスの大学において博士論文を執筆する大学院生が多いことが本専修の特徴である。

研究者の来日講演や国際シンポジウムの開催など、フランス語圏の大学との交流も活発に行われている。これらの講演会やシンポジウムについては専修のホームページに随時案内が掲載される。

https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/french_lang_lit/fl1-top_page/

イタリア語学イタリア文学専修

准教授 村瀬 有司
特定准教授 イダ・ドゥレット

16世紀イタリアの詩と詩論
近現代イタリア文学

〔著書・論文〕 村瀬：トクァート・タツソ『詩作論』（訳書、水声社、2019年）、パオロ・ジョーヴィオ『戦いと愛のインプレーザについての対話』（抄訳、『原典イタリア・ルネサンス芸術論』下巻、名古屋大学出版会、2021年、所収）；*Some effects of separated direct speech in Tasso's «Gerusalemme liberata»* in «Studi Tassiani» 69, 2021.

ドゥレット：E. Montale, *Antologia da "Altri versi"*, prefazione di Alberto Casadei, introduzione, selezione e commento a cura di Ida Duretto, Pisa, ETS, 2017. «*Il mondo può / fare a meno di tutto, anche di sé*». Montale, Sartre e il tema della fama in "All'alba", in «REM, Rivista Internazionale di Studi su Eugenio Montale», 1, 2020. «*Que' due lettori (forse voleva dire attori)*»: *Madame de Staël, Leopardi e la traduzione 'perfetta'*, in «*Studium Ricerca*», 5, 2020.

イタリア文学は、ダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョの三大詩人を筆頭に、アリオストやタツソらルネサンスの詩人たち、マキアヴェッリやブルーノをはじめとする個性的な思想家、ガリレオに代表される科学者、さらにはゴールドーニやレオパルディやマンゾーニ、あるいはピランデッロやカルヴィーノやウンベルト・エーコといった近現代の作家・詩人・戯曲家など、多彩な逸材を擁している。特にイタリアの古典作品の影響は、中世から現代に至るまで、ヨーロッパの文芸・芸術・思想に幅広い影響を及ぼしている。

一方、イタリア語学イタリア文学を専門に学ぶことのできる国内の研究機関は非常に少ない。研究の裾野が狭いために、重要でありながらいまだ日本に紹介されていない詩人・作家も数多い。このような現状のなか、当専修は、国内の数少ない研究機関としてイタリア文学を学ぶ貴重な機会を提供している。

専修担当教員の村瀬は、ルネサンス期の詩と詩論を研究している。特定准教授のイダ・ドゥレットは近現代のイタリア文学の研究を行っている。専修の授業では、ダンテ、ペトラルカからレオパルディ、モンターレ、カルヴィーノまで、多様な詩人・作家を取り上げている。また他大学の先生方の協力をえて幅広い分野からトピックを提供することに努めている。若手研究者主催の読書会も盛んに行われている。

専修の授業で何よりも重要となるのは、原典の正確な読解である。大学院においてもまずイタリア語の読解力を十分に培ったうえで、各自の研究分野にアプローチすることになる。なお、最近の修士・博士論文で取り上げられた作家・詩人は、ダンテ、ボッカッチョ、ロレンツォ・デ・メディチ、タツソ、マンゾーニ、クローチェなどである。

専修の情報はこちらから：[HP | 京都大学イタリア語学イタリア文学専修 \(italomaniakyoito.wixsite.com\)](http://www.italomaniakyoito.wixsite.com)

(Twitter) <https://twitter.com/italkyoto>